

# 中央ユーラシアと東アジア世界

匈奴の国家と秦・漢が現れた紀元前3世紀以降、ユーラシアの東側には、遊牧と農耕の2つの世界が並び立った。7世紀、可汗と皇帝を兼ねた唐の君主がこれらを統合した。

Q▶ 2つの世界はそれぞれどのような特徴をもつ社会を形成し、またどのような関係にあったのだろうか。

## 中央ユーラシア——草原とオアシスの世界

Q▶ 中央ユーラシアの人々の動向は、世界の歴史にどのような影響を与えたのだろうか。

### 中央ユーラシアの風土

Q▶ 中央ユーラシアの風土に適応して、人々はどのような生活を営むようになったのだろうか。

ユーラシア大陸の中央部は、パミールの東西にのびる大山脈が高温多湿のアジアの季節風(モンスーン)をさえぎるために乾燥し、寒暖の差が大きい大陸性気候を特徴とする。ここには東のモンゴル高原から西の黒海北岸にかけて広大な草原が連なり、その南にはいくつもの砂漠が広がっている。そして、砂漠のあいだには高山地帯の雪解け水を水源とする中央アジア①のオアシスが点在する。この広大な空間を中央ユーラシア②と呼ぶ。ここでは、きびしい環境に適応した草原の遊牧民や、オアシスの定住民が活躍し、彼らは周辺の諸勢力と様々な関係を結びながら世界史の展開に大きな役割を果たした。

①ユーラシア大陸中央部の地域名称。その範囲は一定ではないが、パミールの東西に広がる砂漠・オアシス地域と北部の草原地域を中心とする。現在では、カザフスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、タジキスタン、キルギス、中国の新疆ウイグル自治区などの地域にあたる。

②内陸アジアという名称も長く用いられてきた。

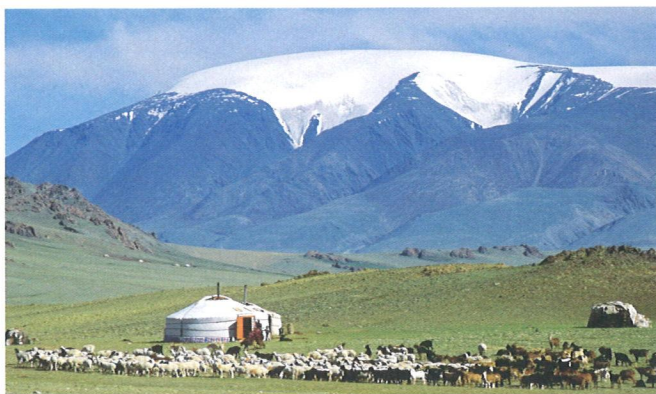




「黄金人間」 前4世紀～前3世紀の遊牧貴人の葬衣で、全身が金でおおわれている。筒袖の上衣にズボンという服装は騎馬に適しており、これはのちに中国・戦国時代の趙(→p.33)で胡服騎射というかたちで取り入れられた。

①匈奴の場合では、君主に従う諸王は一万の騎兵を率いるとされ、その下に千人長、百人長、十人長の指揮する部隊が編制された。こうした軍事組織はのちに社会組織ともなり、チンギス=カンによる千戸制(→p.144)もその一例である。

②スキタイ文化の特徴は、特有の動物文様をもつ馬具や武器である。よく似た遺物は、スキタイの活動地域のみならず、ユーラシア東部の草原地帯にも広く分布する。



遊牧民の生活風景 モンゴルの草原地帯。遊牧民の住居は移動が簡単なゲル(組み立て式の家)であった。

## 遊牧民の社会と国家

Q ▶ 騎馬遊牧民は、なぜ強大な国家を築くことができたのだろうか。

中央ユーラシアの草原地帯では、羊・ヤギ・馬・牛・ラクダなどの家畜を主要な財産とする遊牧民が、草と水を求めて季節的に移動し、遊牧と狩猟による生活を営んでいた。彼らのおもな食料は乳製品や肉類であり、衣服は毛皮が中心で、住居も木製の骨組みをフェルトでおおう、移動に適した組み立て式であった。このように、家畜は衣・食・住すべての需要を満たす貴重な財産であった。彼らのあいだに青銅製の馬具や武器をもった騎馬遊牧民が登場するのは、前9世紀～前8世紀頃のことである。馬上から矢を射る遊牧民の集団は、機動性にすぐれた軍勢力を備え、それは鉄製の武器を得るとさらに向上した。

騎馬遊牧民は血縁的なつながりをもつ氏族や、それを束ねた部族を単位として活動し、ときに統率力のある君主のもとで部族連合を組み、強大な遊牧国家を形成した。君主は忠実な親衛隊を従え、十進法に従って編制された軍団①を率いて略奪や征服をおこなうなど、騎馬軍団の威力は周辺の諸勢力に大きくまさった。しかし、統率が失われると部族連合の再編がおこり、遊牧国家は興亡を繰り返した。また彼らは、ユーラシアの東西を結ぶ交易や文化交流にも貢献した。彼らが利用したルートは「草原の道」と呼ばれる。

## スキタイと匈奴

Q ▶ 遊牧国家の興亡は、ユーラシア大陸の東西にどのような変動をもたらしたのだろうか。

文献上で知られる最初の遊牧国家は、前7世紀頃に黒海北岸の草原地帯を支配したスキタイ②である。その軍事活動はアッシリアなど古代オリエントにもおよび、黒海北岸のギリシア人植民市とも交流した。中央ユーラシア東部でも、前3世紀後半から騎馬遊牧民のあいだに統合の動



## 漢代の歴史家、司馬遷の描いた匈奴の姿(『史記』匈奴列伝より)

彼等は牧草をさがしもとめて畜類を牧するために転移する。その家畜で多いものは馬・牛・羊であり……水と草をともとめて転々と移動し、城郭や常住地、耕田の作業はない。……文書はなく、言語を以て[相互に]約束をする。小兒もよく羊に騎り、弓をひいて鳥・鼠を射ることができる……士はみな力強く弓を引くことができ、すべて甲冑をつけた騎士となる。その風俗は、平和の時は家畜にしたがって移動し、鳥や獣を射獵して生業とするので、一旦急変あるときは、人々は攻戦になれており、侵掠攻伐をする。……勝つと見れば進み、不利と見れば退き、遁走を恥としない。

(内田吟風・田村実造他訳注『騎馬民族史1 正史北狄伝』)

Q▶ こうした描写から読み取れる遊牧民社会の特徴は、どのようなものだろうか。



スキタイ美術 金製の鹿形装飾。

きが始まり、タリム盆地東部に月氏<sup>げつし</sup>④、モンゴル高原に匈奴<sup>きょうど</sup>などが現れた。匈奴<sup>きょうど</sup>は単于<sup>ぜんう</sup>と呼ばれる君主のもとで強力な遊牧国家をつくり、とくに前3世紀末に即位した冒頓<sup>ぼくとつ</sup>単于<sup>ぜんう</sup>④は、西では中継貿易で利益をあげていた月氏を攻撃して中央アジアのオアシス地域を支配下におさめ、東では成立まもない漢<sup>かん</sup>を圧迫した。しかし、匈奴はやがて漢の攻勢を受けて前1世紀半ばに東西に、後1世紀半ばには南北に分裂した。南匈奴は後漢<sup>かん</sup>にくだり、北匈奴は遠く西方に移動した。

後3世紀には中央ユーラシアの東西で遊牧民の活動が活発となり、東部では鮮卑<sup>せんび</sup>などいわゆる「五胡<sup>ごこ</sup>」が華北<sup>かほく</sup>に進出し、4世紀以降、遊牧民と定住民がまじりあうなかでつぎつぎと政権を樹立した(五胡十六国<sup>じゅうろっこく</sup>)。一方、西部ではフン人の大規模な西進が始まり⑤、ゲルマン人の大移動をうながした。こうして中央ユーラシアの騎馬遊牧民は、ユーラシアの東西に大変動をもたらすことになった。

④ 月氏は中央アジア西南部に移動して大月氏となり、その領域からはクシャーナ朝(→p.55)が生まれた。

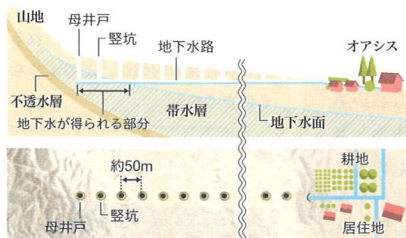
④ 「冒頓」はトルコ=モンゴル語で「勇者」を意味するバガトゥル(パートル)の漢字音写と考えられている。

⑤ 西へ移動した北匈奴とフン人を同一とみなす説があるが、確証はない。ただし、匈奴の移動がほかの遊牧集団の西進を誘発した可能性は考えられる。

## オアシス民の社会と経済

Q▶ オアシス民は、遊牧民とどのような関係をもっていたのだろうか。

乾燥した砂漠・草原地帯のなかでも、雪解け水による河川や地下水を利用できる中央アジアのオアシスでは、古くから定住民の生活が営まれていた。オアシスは、防御施設を備えて市場や寺院をもつ都市部と、灌漑による集約的な農業を営む周辺の農村部からなる独立した生活・経済圏であり、手工業生産や隊商交易の拠点としても重要であった。パミールの東部ではタリム盆地<sup>しやうえん</sup>周縁部、西部ではソグディアナやフェルガナなどに多数のオアシス都市が点在し、ラクダに荷を乗せた隊商がユーラシアの東西を往来する「オアシスの道」を形づくった。これは「草原の道」とあわせて、一般に「絹の道」(「シルク=ロード」)とも呼ばれる。オアシ



カナート(カレーズ)の構造図 高温・乾燥のきびしいところでは、水の蒸発を防ぐため図のような人工の地下水路(カナート)を利用した。竖坑を延々と掘り抜き、長さが数10kmにおよぶ例もみられる。上は断面図、下は平面図。



オアシスの景観 現在の中国・新疆ウイグル自治区に位置するトゥルファン。



中央アジアを通る「オアシスの道」

ス都市は連合して大きな国家をつくることはなく、周辺の大国の支配下に入ることが多かった。オアシス都市の資源や東西交易の利益は、北方の草原地帯の遊牧国家にとっても重要であり、たとえば、匈奴はオアシス都市の支配をめぐり漢と争奪戦を繰り返した。

中央アジアのオアシス民は、しばしば遊牧国家による略奪や支配を受けたが、両者の関係はつねに敵対的であったわけではなかった。オアシス民の生み出す穀物や織物は、遊牧民のもたらす畜産物と日常的に交換されたほか、遊牧国家が保障した隊商路の安全は双方に経済的な利益をもたらした。このように遊牧民とオアシス民との関係は、緊張をはらみつつも互恵的であり、それは中央ユーラシアにとどまらず、東アジアの歴史の展開にも重要な役割を果たした。

## 前4世紀に法家の商鞅の改革によって国力をつけた。

① 諸国が共同で秦に対抗する蘇秦の合従策や、個別に秦と同盟する張儀の連衡策がとられた(→p.34)。

② 実用書以外の書物を焼却し(焚書)、多くの学者を穴埋めにした(坑儒)とされる。

③ 最初に陳勝・呉広による農民反乱がおこった。陳勝の「王侯將相いずくんぞ種(家柄)あらんや」という言葉は、戦国時代以来の実力主義の世情を表している。

## 秦・漢帝国

2

Q 秦・漢の時代に、地域間の結びつきはどのように変化したのだろうか。

### 「皇帝」の出現

Q 新たに現れた「皇帝」は、それまでの「王」とどのように異なるのだろうか。

都は咸陽

前4世紀、「戦国の七雄」の一国であった西方の秦が、新しい政治制度や技術を取り入れて強大化した。東方の諸国は他国と同盟を結んで自国の防衛をはかったが、前221年、秦王の政に征服された。彼は国内を郡・県にわけて官僚を派遣する郡県制を征服地にも導入し、新たな君主





始皇帝陵の兵馬俑 兵士と軍馬をかたどった俑(陶製の像)。約8000体すべての造形が異なる。始皇帝の強大な権力と、それを守る難しさを伝えている。



兵馬俑



の称号である「皇帝」を名乗って(始皇帝)、度量衡・文字の統一

や思想の統制<sup>④</sup>をおこなった。また、北方では戦国時代以来の

長城を修築して匈奴と戦い、南方では華南に進出した。万里の長城

しかし、あいつぐ軍事行動や土木工事の負担に人々は苦しみ、

- 5 始皇帝が死去すると東方各地で反乱がおこって<sup>⑤</sup>、秦は滅亡した。その後の混乱のなかで、楚の名門出身の項羽を破った農民出身の劉邦が、諸勢力から皇帝に推戴され(高祖)、漢王朝を開いた(前漢)。



秦・漢の青銅貨幣 秦の半兩錢(左)と漢の武帝の時代に発行された五銖錢(右)。円形・方孔の銅銭は、始皇帝の征服活動によって東方に広まり、漢に受け継がれて東アジアの貨幣の基本形となった。

## 漢代の政治

Q▶ 漢の支配体制は、どのように変化していったのだろうか。

- 10 漢は秦の制度の多くを引き継いだ。高祖は秦の都咸陽の近くに新都長安(現在の西安)を建設し、統一以前の秦の領域を郡県制によって直接支配する一方、功臣や一族を王に任じて、かつての東方諸国の領域の支配をゆだねた<sup>⑥</sup>。対外的には、冒頓単于のもとで強大化した匈奴に敗れ、こののち漢は匈奴に屈服して和平をはかった。

- 15 高祖の死後、皇帝と諸王の対立が深まり、やがて軍事衝突に発展した(呉楚七国の乱)。これに勝利した皇帝は、諸王国の統治に干渉するようになった。前2世紀後半に即位した武帝は、匈奴を撃退するとともに、諸王の実権を奪い、南越国<sup>⑦</sup>や衛氏朝鮮<sup>⑧</sup>を滅ぼして、漢の支配下に入れた。また、張騫を大月氏に派遣したことをきっかけに、中央アジアの交通路をおさえて、タリム盆地一帯にまで勢力をのばした。

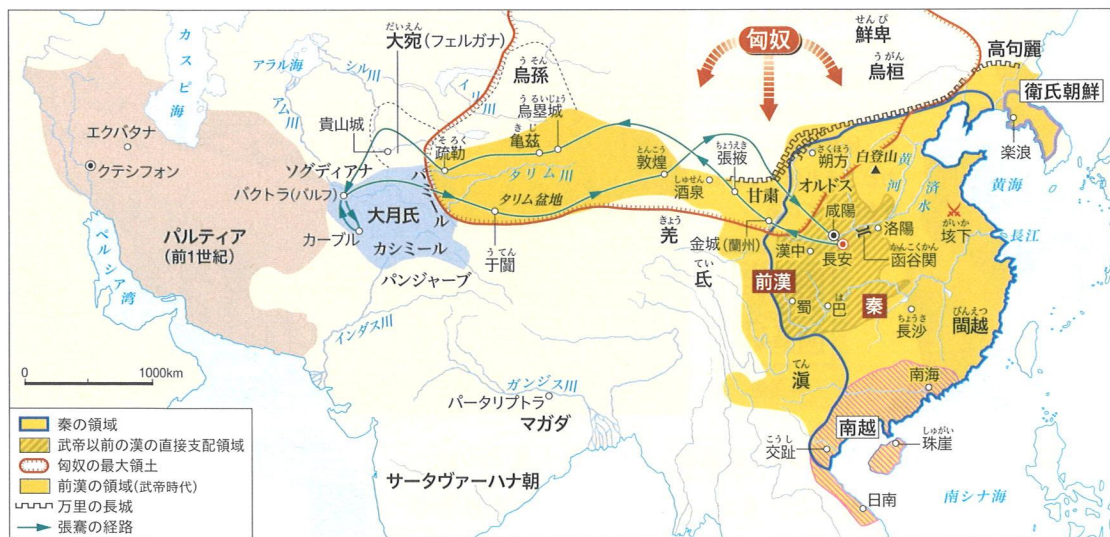
- 20 武帝は、地方長官の推薦で官吏を選任する人事制度(郷举里選)をとり、諸王国にも中央から官吏を派遣し、さらに監察官を送って全国を監視した。経済面でも、塩・鉄の専売や物価調整策<sup>⑨</sup>などによって国内の統合

④ 漢の初期の支配体制を、郡県制と封建制(→p.32)を併用したという意味で、「郡国制」と呼ぶこともある。

⑤ 秦末の混乱期に独立した国家で、広東・広西・ベトナム北部を中心に、その周辺にまで勢力をおよぼした。

⑥ 前2世紀に衛氏が朝鮮西北部に建てた国家。武帝はこれを征服して楽浪などの郡をおいた。

⑦ 各地の特産品を国家がほかの地方へ輸送して物価を均一にする政策(均輸)と、貯蔵した産物の価格が上がると売り出し、下がると買い入れて、物価の水準を保つ政策(平準)があった。



秦・前漢時代のアジア

Q> これは、武帝の死後に役人と学者が塩・鉄の専売の是非を議論した記録である。この一節から、鉄の専売はどのような意味をもっていたと考えられるだろうか。

### 『塩鉄論』禁耕

そもそも秦・楚・燕・齊では、土地の肥沃さや硬さが異なります。農具の大きさや形状も地域ごとに違い、それぞれ適したものがあつたのです。ところが国家が鉄器の製造を一手に握り、規格を統一してしまつたので、鉄製農具は使いにくくなり、農民も不便を強いられることになりました。おかげで農民は耕作に疲れ、土地は荒れ放題となつて、みな困窮しております。

(著者訳)

を進めたが、こうした集権的な政策は、匈奴との戦いなどあいつぐ外征による社会不安や財政難への対応でもあつた。しかし、徳や礼を重んじる儒学がしだいに盛んになると、行き過ぎた集権的な政策を改めて、実情の異なる各地域に配慮した政治を求める動きが高まつた。これを受けて、前1世紀末には、外戚(皇后の親族)の王莽が儒学の理想にもとづく新たな体制①を築いた。

王莽は、漢の皇帝から帝位を奪って新をおこしたが、さらに踏みこんだ改革を進めたため、反発をまねいて支持を失つた。匈奴との抗争や赤眉の乱などの反乱によって新は滅亡し、豪族を率いた漢の一族の劉秀が、皇帝(光武帝)となつて漢を復興した(後漢)。光武帝は洛陽に都をおき、前漢末の体制を継承した。しかしその後、皇帝側近の外戚・宦官②が対立を繰り返すようになり、2世紀後半には、こうした状況を批判した官僚・学者が宦官によって大弾圧され(党錮の禁)、中央政府への信頼は失われた。さらに2世紀末、宗教結社の太平道が黄巾の乱をおこすと、各地に軍事政権が割拠して、220年に後漢は滅んだ。

① 儒学が理想とする周の封建制をまねて、天に仕える皇帝が徳によって多様な地域を統合するというもの。また、王莽が整えた天をまつる儀式などは、その後の歴代の王朝に受け継がれた。

② 後宮に仕える去勢された男性の呼称。





牛耕 後漢時代につくられた墓室に刻まれた牛耕の様子(拓本)。



石經 後漢末期に洛陽の學校に立てられた、儒学の經典を刻んだ石碑の一部。これによって、經典の字句の統一がはかられた。写真は『春秋』の一部で、囲みの部分には、宋を盟主にして齊と楚(→p.33)が会合を開いたことが刻まれている。

③鉄製農具や牛耕の導入は費用がかかるため、一般的な小家族には導入しづらかったことも、この背景にあった。

④当時重んじられた『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋』を総称して『五经』という。

⑤王・皇帝など支配者の年代記(本紀)と臣下の伝記(列伝)を組み合わせ、歴史を叙述する形式のこと。後漢時代に班固(32~92)が編纂した『漢書』によって定着した。一方、年代順に記録するものは編年体という。

⑥現在の中国の人口の大多数を占める民族。黄河流域を中心とした諸集団の長期にわたる交流と融合によって形成された。

## 漢代の社会と文化

Q 統一国家の出現は、社会や文化にどのような影響を与えたのだろうか。

戦国時代以降、小家族による戸が社会の基本単位となり、華北を中心に鉄製農具や牛耕も広まった。しかし、自然災害や労役の負担などで人々は困窮し、土地を買い集めた豪族の奴隷や小作人となるものも多かった。豪族の大土地所有を制限しようとする動きもあったが効果はあがらず、後漢時代には豪族が儒学を学んで官僚となり、国政に進出するようになった。

漢代の初めは、秦で尊ばれた法家にかわり、ゆるやかな体制に適合する黄老の政治思想が重んじられた。武帝の時代には、董仲舒の活躍などで儒学の影響力が高まり、前漢末までに国家の学問としての地位を確立し、經典も整理された。後漢時代には郷学里選において儒学が重視されたので、儒学の研究・教育が盛んになり、經典の字句の解釈をおこなう訓詁学が鄭玄らによって発展した。漢代には儒学のほかにも統一国家を支える思想や技術が現れ、伝説の時代から武帝の治世までの歴史を記した司馬遷の『史記』が中国の歴史書の基本的なかたちをつくれたほか、官吏の業務に必要な数学や公的な暦をつくる天文学の研究も進み、さらに記録用の素材として紙が改良された。文学では、華北の古い詩歌を集めた『詩経』が儒学の經典の1つとして重視されたほか、長江流域の戦国時代以来の詩歌が『楚辞』にまとめられた。

前漢末に儒学にもとづいた体制が定まると、以後これが中国の理想的な国家像となった。今日でも用いられる「漢族」「漢語」「漢字」といった表現は、漢王朝の歴史的な影響力を物語っている。中国外部の世界との交流も盛んになり、中央アジアに派遣された前漢の張騫・後漢の班超らによって西方の事情が伝えられたほか、インドから仏教も伝来した。ま

西域都護として活躍した後漢の武將。

部下の甘英を大秦(ローマ)に派遣した。

魏は曹丕、呉は孫権、蜀は劉備が建国した。



「漢委奴国王」金印 光武帝が倭人(日本人)を封建して与えた印。福岡県の志賀島で発見された。蛇の形のつまみは東方の異民族の象徴である。

①ローマ皇帝マルクス=アウレリウス=アントニヌス(→p.79)とされる。

②この仕組みは、のちの冊封体制(→p.47)の原型となった。

③同じ頃、遼東には公孫氏政権が現れ、朝鮮半島にも進出して、寒溱郡の南に帯方郡をおいた。

④一般に、匈奴・羯・鮮卑・氏・羌を指す。

⑤「長江の南」の意味だが、指し示す地域は時代や文脈によって違いがある。一般的には長江下流域をいうことが多い。

た2世紀半ばには、<sup>たいしんおうあんどん</sup>大秦王安敦<sup>①</sup>の使節が海路で日南郡に達した。こうした状況を受けて、皇帝を中心に多様な地域が統合されるとする理念のもと、漢は近隣地域の首長を臣下として封建するようになった<sup>②</sup>。

## 中国の動乱と変容

3

▶ 魏晋南北朝時代の社会には、どのような特徴があったのだろうか。

### 動乱の時代

▶ 遊牧民族の動きは、魏晋南北朝の動乱とどのように関係していたのだろうか。

3世紀前半に後漢が滅亡すると、<sup>かほく</sup>華北の魏<sup>③</sup>、<sup>しせん</sup>四川の蜀<sup>④</sup>、<sup>しん</sup>長江中下流域の呉<sup>⑤</sup>が並び立ち、近隣の異民族を引き入れながら抗争を繰り返した(三国時代)<sup>⑥</sup>。その後、魏の將軍<sup>しばえん</sup>司馬炎<sup>⑦</sup>(武帝)が帝位を奪って建てた<sup>しん</sup>晋<sup>⑧</sup>(西晋)が中国を統一するが、まもなく皇帝の一族の抗争(八王の乱)によって混乱におちいった。こうしたなか、4世紀初め、華北への移住を進めていた遊牧諸民族(<sup>ごこ</sup>五胡<sup>⑨</sup>)が蜂起し、<sup>らくよう</sup>洛陽・<sup>ちやうあん</sup>長安を攻略された晋は滅んだ。しかし、江南<sup>⑩</sup>に逃れた晋の皇族の<sup>しばえい</sup>司馬睿<sup>⑪</sup>は、<sup>けんこう</sup>建康(現在の南京)で即位して晋を復興した(東晋)。

こののち華北では多くの国々が興亡し(<sup>じやうろつこく</sup>五胡十六国<sup>⑫</sup>)、5世紀前半、<sup>せん</sup>鮮卑<sup>⑬</sup>の拓跋氏が建てた北魏が華北を統一した。同じ頃、鮮卑が南下した後、<sup>じやうぜん</sup>柔然が強大となった。北魏は北の柔然に対抗する一方、南の農耕民社会の安定につとめるようになり、<sup>こうふんてい</sup>孝文帝<sup>⑭</sup>は都を平城(現在の大同)から洛陽に移して、鮮卑の制度や習俗を中国的



三国時代の中国



5世紀の東アジア

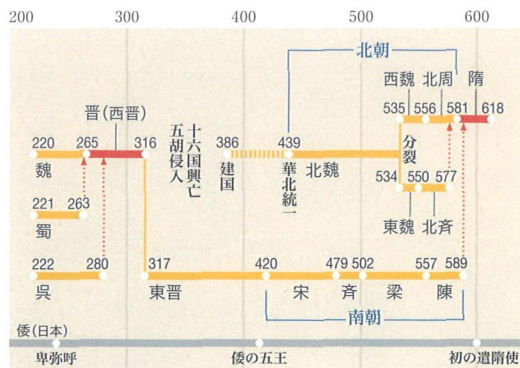




## 『顔氏家訓』

北斉のある名家の人が、こんな話をしてくれたことがある。「うちには17歳になる一人息子がおります。ものを書くのがうまく、鮮卑語と琵琶をしこんだところ、だんだん上達してきております。これを手がかりとして高位のお方に仕えすれば、きっとご寵愛を受けましょう。これもまた大事なことです」。私はうつむいて答えなかった。いやはや、これは教育とはいえない。そんな芸技によって出世できるのだとしても、お前たちにはしないでほしいものだ。（著者訳）

Q▶ これは、南朝出身で北朝に仕えた人物が子孫に残した教訓書の一節である。遊牧民族の文化は、どのようにして中国の人々のあいだに広がっていったのだろうか。



魏晉南北朝の諸王朝



北魏初期の祭天遺跡 中国・内モンゴル自治区フフホト市の北(かつての武川鎮付近)にある、遊牧文化と中国文化の融合を示す遺跡。北魏初期の皇帝たちが、中国式の円形の祭壇を築いて、遊牧的な方法で天をまつる儀式をおこなっていたことが、発掘調査で明らかになっている。

なもののに改めた。しかしその後、こうした政策に反発した人々がおこした反乱(六鎮の乱<sup>りくちん</sup><sub>523~530</sub>)をきっかけに、北魏は分裂して滅亡した。6世紀半ば、モンゴル高原では柔然にとってかわった突厥<sup>とっけつ</sup><sub>→p.52</sub>が急速に勢力をのぼし、これと結んだ北周が華北を再統一した。北魏から北周に至る華北の諸王朝を北朝<sup>ほくしやう</sup><sub>439~581</sub>という。

一方、東晋では、長く続く軍事的緊張を背景に武将がしだいに力をつけ、5世紀前半に東晋の皇帝は帝位を奪われた。これ以降、長江流域では4つの王朝がつぎつぎに交替した(南朝<sup>なんしやう</sup><sub>420~589</sub>)。こうした三国時代から南朝・北朝までの動乱期は、魏晉南北朝時代と称される。

## 魏晉南北朝の社会と文化

Q▶ この時代に仏教や道教が力をもつようになったのは、なぜだろうか。

後漢末頃から、社会秩序の混乱を受け、豪族が中心となって村落の自衛がはかれるようになった。豪族は戦乱で土地を失った人々を勢力下において莊園を経営し、社会的な指導力を高めた。三国時代の魏で始まった九品中正<sup>きゅうひんちゆうせい</sup><sub>⑨</sub>は、有力な豪族による高級官職の独占をまねき、同時に全国的な家柄の序列も固定化していった。こうして形成された名門を貴族と呼ぶ。貴族の影響力の高まりに対し、北魏で創始された均田制<sup>きんてんせい</sup>のよう

⑥ 柔然への備えとして北辺におかれた6つの駐屯地(鎮)がおこした反乱。

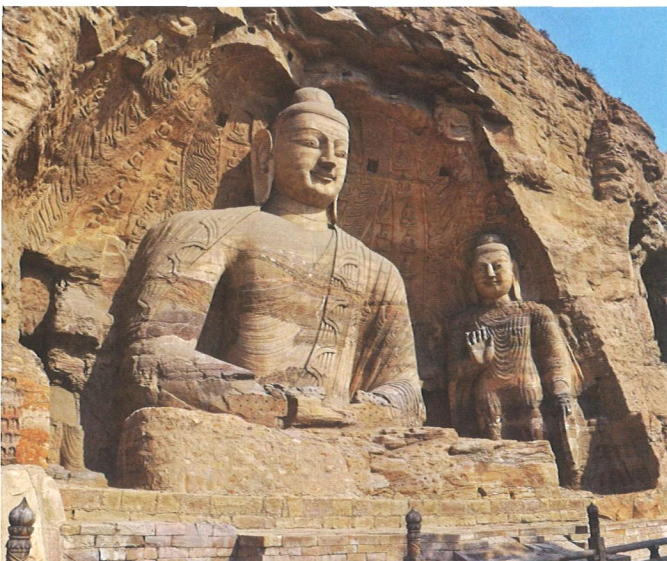
⑦ 関中(現在の西安一带)に拠点をおいた西魏(535~556)・北周は、六鎮の1つである武川鎮の流れをくんでいた。

⑧ 同じく建康(建業)に都をおいた呉・東晋と南朝の4王朝とをあわせて、六朝と呼ぶこともある。

⑨ 官位を9つの品(等級)に分類し、地方におかれた中正官がそれにあわせて人材を等級づけて推薦する官吏登用制度。

- ・西晋の占田・課田法の占田は、身分に応じて土地所有の上限を定め、戸調や兵役を課したもの。課田は一般戸民に公有地を強制的に割り付け、収穫の一部を田税としておさめさせた制度とする説などがある。
- ・魏の屯田制は、国家が耕作者の集団において、官有地を耕作させる制度。





敦煌・莫高窟の仏像 中国・甘肅省西端のオアシス都市敦煌は、仏教が中央アジアから中国に流入する窓口にあたり、4世紀以後千年余りにわたって、壮麗な石窟寺院が造営された。写真の仏像は唐代のもので、左から如来、羅漢、菩薩、力士像。

雲崗の石窟 5世紀後半から6世紀にかけてつくられた。ガンダーラ様式・グプタ様式(→p.56、59)の影響がみられる。

には、戦乱がとくに激しかった華北から長江中・下流域への大規模な移住も起こり、貴族のもとで江南の開発が進められた。

文化も社会の動向に連動しながら展開した。長く続いた漢王朝が減んで伝統的な権威が弱まった魏・晋の時代には、道家思想や仏教の影響を受けながら、世俗を超越した自由な議論をおこなう清談が流行した。4世紀以降には、西方からの人や文化の到来にともなって仏教が盛んになり、華北を訪れて布教につとめた**仏図澄**や、仏典の翻訳に活躍した**鳩摩**

**羅什**のほか、中国からも**法顕**のように仏の教えを求めてインドにおもむくものが現れ①、華北では多くの石窟寺院が造営された。仏教の普及に

①法顕はインド旅行中の記録を『仏国記』にまとめた。

②仙人や不老不死を信じる思想。

刺激されて、北魏の時代には民間信仰と神仙思想②に道家の説を取り入れた道教も成立し、**寇謙之**は教団をつくって仏教に対抗した。



「女史箴図」 宮廷の女官が守るべき教えを説いた文章に絵を付したもの。写真は唐代の模写。

南朝においても、仏教・道教が儒学と並ぶ貴族の重要な教養となった。また、華北から江南に逃れた貴族たちは、南方の自然や田園に美を見出し、文学や美術の題材とした。**陶淵明**の詩はその代表である。文体は対句を多用して技巧をこらした四六駢儷体が主流となり、南朝では古今の名文を集めた『**文選**』が編纂された。絵画では「女史箴図」

の作者とされる**顧愷之**、書では**王羲之**が有名で、後世まで尊ばれた。

梁の昭明太子が編纂した。

東晋の詩人。  
「帰去来辞」などの作品を残した。



## 朝鮮・日本の 国家形成

Q この時代の中国の情勢は、朝鮮半島や日本の国家形成にどのような影響を与えたのだろうか。

漢代までの東アジアでもっとも人口が密集していたのは華北であったが、後漢末から魏晋南北朝にかけての戦乱によって周辺地域へ人々が流出し、それにともなって中国文化圏も拡大した。華北からの移民の流入による江南での貴族的な文化の開花は、その一例である。また、朝鮮半島や日本へ向かった人や文化の流れは、これらの地域における新国家の形成に影響を与えた。

中国東北地方の南部におこった高句麗は、4世紀初めに朝鮮半島北部へ進出した。同じ頃、朝鮮半島南部でも、東に新羅、西に百済が成立し、南端は加耶(加羅)諸国となった。これらの国家による戦乱は、さらに朝鮮半島から日本への人や文化の流れを引きおこした。3世紀に邪馬台国の女王卑弥呼が三国の魏に使節を送った頃、日本列島は小国が争う状況にあったが、4世紀以降にヤマト政権による統一が進んだ。

朝鮮半島の諸国は中国王朝の権威を借りてみずからの力を高めようと、盛んに朝貢をおこなった。5世紀には倭国(日本)の王もたびたび南朝に使節を送った(倭の五王)。中国王朝も、南朝と北朝、あるいは北朝と遊牧諸民族のあいだの対抗関係のなかで優位に立つため、積極的に近隣の勢力に官位や称号を与えて、自国の影響下に取り込んだ。

## 東アジア文化圏の形成

Q 唐の影響力は、中央ユーラシアと東アジアで比較すると、どのように異なっていたのだろうか。

### 隋から唐へ

Q 唐の勢力圏は、どのような広がりをもっていたのだろうか。

6世紀末、北周の武将楊堅が権力を握り、皇帝(文帝)となって隋を建てた。彼は対抗関係にあった突厥を東西に分裂させ、北方の遊牧諸民族の動きをおさえる一方で、九品中正にかわる新しい人材登用制度として、儒学の試験によって官吏を選ぶ科挙を始めた。さらに南朝を滅ぼし、南北朝の陳を倒した。北朝の諸制度をあわせて体制を固めつつ、開発の進んでいた江南を華北と結びつける大運河の建設に着手した。大運河の整備は文帝の子煬帝の



高句麗王碑 高句麗の最盛期を築いた広開土王(在位391～412)の事績を、自然石の上に漢字で刻んでいる。5世紀初めのもの。

③ 高句麗・新羅・百済の3国が並び立っていた時代を、朝鮮史では三国時代という。

④ 朝鮮半島や中国から日本に移り住んだ人々を渡来人と呼ぶ。渡来人は日本に先進的な技術や文化を伝える役割を果たした。

⑤ 近隣諸国が中国の皇帝に定期的に使者を送って貢物をすること。皇帝がこれに対して返礼品を与えることで、おたがいの外交関係が確認されるだけでなく、実質的には交易の役割も果たした。

⑥ このようにしてできあがった、中国王朝を中心とした理念上の秩序を、冊封体制と呼ぶこともある。  
都は大興城



## 7世紀のアジアと大運河

① 鮮卑の拓跋氏の流れをくむ、北朝から隋・唐に至る諸王朝を、その連続性を重視して拓跋国家とも呼ぶ。

② 家畜を網で制御するように諸民族をつなぎとめることから、このような支配方式を羈縻政策と呼ぶ(「羈」「縻」は牛馬の綱のこと)。

③ 律では刑罰が、令では行政の仕組みが定められた。

④ 唐の制度では、中書省が皇帝の命令の草案をつくり、門下省が審議し、尚書省が執行した。尚書省には吏(人事)・戸(財政)・礼(祭祀)・兵(軍事)・刑(司法)・工(土木)の六部が所属した。また、御史台が行政の監察をおこなった。

⑤ 魏晉南北朝期には、郡の上位の行政単位である州の数が増大して、郡の存在意義が小さくなっていた。

時代にかけて進められ、南北の交通は容易になったが、工事に従事した民衆は疲弊した。煬帝の<sup>ひへい</sup>高句麗遠征の失敗をきっかけに各地で反乱がおこり、混乱のなかで自立した武将の<sup>りえん</sup>李淵(高祖)が、隋を倒して唐を建てた①。

高祖は隋の都大興城を<sup>ちやんあん</sup>長安と改め、唐の都とした。対立する諸勢力を平定して第2代皇帝となった<sup>りせいみん</sup>李世民(太宗)は、国内の諸制度を整えるとともに、東突厥を破った。遊牧諸民族は、太宗を天から権力を授かった可汗とみなすことで、その支配を受け入れた。つぎの<sup>こうそう</sup>高宗は、西突厥を服属させて西域のオアシス諸都市に進出し、また新羅と結び百済・高句麗を滅ぼして、東方にも勢力圏を広げた。唐は支配下に入れた諸民族に自治を認めつつ、各方面においた<sup>とごふ</sup>都護府に監督させた②。

### 唐代初期の制度と文化

Q 唐代初期の社会には、どのような特徴があったのだろうか。

中国では魏晉南北朝時代に法令の体系化が進み、隋・唐の時代には法典(律令③)に従った整然とした統治制度が打ち立てられた。中央政府には<sup>さんしやう</sup>三省・<sup>りくふ</sup>六部④を中心とした分業体制が確立し、地方行政も州県制に整理された⑤。隋・唐は北朝の<sup>きんてんせい</sup>均田制を受け継いで、成年男性に土地を均等に配分する原則を掲げ、小家族を単位とする穀物・布の納入と労役へ



均田制に関する文書 8世紀半ばの紙文書。土地の支給について書かれているが、支給額は規定どおりではない。



唐代の壁画に描かれた外国使節 右側の2人は中国東北地方や朝鮮方面からの使節、左の人物はビザンツ帝国(→p.93)の使節と考えられている。



唐三彩 唐代につくられた白・緑・黄を基調とする陶器。この作例では、ラクダに乗ったソグド人風の人々が西域の楽器(琵琶)などを奏でている。

の従事(租・調・庸)を税制の基本とした。

唐が広大な領域を支配した時代には、諸国の使節や留学生・商人など、様々な人々が都の長安に集まった。長安には、仏教や道教の寺院のほか、キリスト教の一派の景教(ネストリウス派)や祆教(ゾロアスター教)・マニ教の寺院もつくられた。海路で中国を訪れるムスリム商人も増え、揚州・広州などの港町が発展した。有能な外国人は官僚として取り立てられ、とくにソグド人は軍事や経済など多方面で活躍した。この時期に花開いた国際的な文化は、やがて中国社会に浸透し、人々の生活や意識をかえていった。

この時代には、道教・仏教が権力者の保護を受けて栄えた。外国との交流が活発になったことを受け、玄奘や義浄がインドを訪れて仏典をもち帰った。仏教が中国に定着したことで、浄土宗や禅宗など中国独特の宗派も形成された。また、科擧の導入によって儒学も盛んになり、とくに訓詁学が重視されて、孔穎達らにより『五経正義』が編纂された。文学では、李白・杜甫らの詩人が独創性あふれる名作を生み出した。

⑥ 8世紀に日本から留学した阿倍仲麻呂(698頃～770頃)がその一例である。彼は、李白らと交際し、安南節度使などの高い地位についた。



玄奘 玄奘はインドからもち帰った大量の仏典をもとに大訳訳事業をおこない、中国の仏教学の水準を飛躍的に高めた。彼の旅行の記録である『大唐西域記』は、当時の西域・インドの状況を詳しく伝えている。

Q> こうした描写から読み取れる唐代の文化の国際性は、どのようなものだろうか。

## 『旧唐書』輿服志

〔玄宗〕開元年間(713～741年)のはじめ、陛下のお出ましにお供して馬に乗る女官たちは、全員が西域の帽子をかぶり、化粧して整えた顔をあらわにして、目隠しの類を用いることはなかった。下々の者も身分を問わず、こぞってこれをまねたものである。……宮中では西域の楽曲がとくに好まれ、やんごとなきお方々の召し上がり物もすっかり西域の食品ばかりで、男も女もみな西域の衣服をまとうありさまであった。

(著者訳)



ぶつこくじ たほうとう 仏国寺の多宝塔 仏国寺は新羅の時代に建立された。塔は石造で、精巧な手法でつくられている。韓国、慶州。



8 世紀後半のアジア

### 唐と近隣諸国

Q 近隣諸国は、唐の制度や文化からどのような影響を受けたのだろうか。

唐の文化は外交関係を介して近隣諸国にも広がり、唐を中心とする東アジア文化圏が形成された。

チベットでは、7 世紀にソンツェン＝ガンボが吐蕃<sup>とばん</sup>を建てた。吐蕃は 7～9 世紀のチベット王。唐の制度を取り入れつつ、インドの影響も受けてチベット文字やチベット仏教を生み出した。8 世紀半ばには雲南で南詔<sup>なんしやう</sup>が勢力を広げ、仏教を重んじて漢字など唐の文化を受け入れた。

朝鮮半島では、唐と結んで百済・高句麗を滅ぼした新羅<sup>しんら</sup>が、唐の勢力を追い払い、朝鮮半島の大部分を支配下におさめた。新羅は唐の官僚制を受容したが、その運用は血縁的な身分制度である骨品制<sup>こっぴんせい</sup>を基盤としていた。新羅では仏教が保護され、都の金城<sup>きんじやう</sup>（慶州）を中心に仏教文化が栄えた。また、高句麗の滅亡後に中国東北地方から朝鮮半島北部をおさえた渤海<sup>ほっかい</sup>は、唐の諸制度を積極的に取り入れ、日本とも通交した。

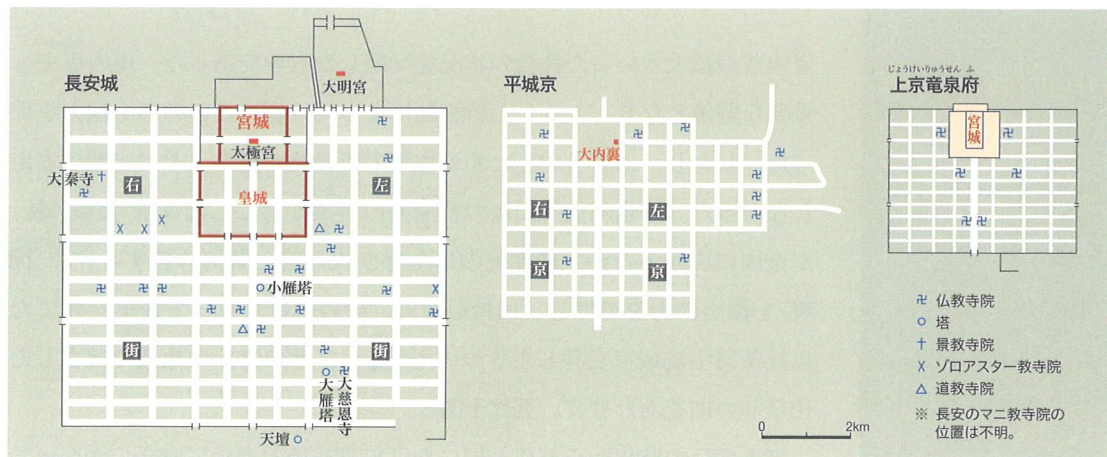
日本も遣隋使・遣唐使を通して中国文化を摂取し、大化改新<sup>たいかかいしん</sup>などを経て律令にもとづく国づくりを進めた。唐の長安にならって平城京や平安京などの都城がつくられ、「日本」という国号や「天皇」の称号も正式に定められた。均田制を模倣した土地分配制度（班田収授法）が施行され、中国と同じ円形・方孔の銅銭も発行された。また、遣唐使は仏教の經典やイラン・インドなどの工芸品をもち帰り、唐の国際的な文化の影響を受けた天平文化が開花した。

① 日本は百済復興のため軍勢を送ったが、663 年の白村江の戦いで、唐と新羅の連合軍に敗れた。



しょうそういん はくろのりわん 正倉院の白瑠璃碗とササン朝のカットグラス 白瑠璃碗（上）はササン朝のもの（下）とよく似ており、イラン方面から中国を経て伝わったと考えられている。奈良の正倉院にはこうした輸入品が多く残されている。





## 唐の変容と五代

Q 安史の乱の前後では、唐の制度や社会にどのような違いがあるだろうか。

整然とした統治体制を打ちたてた唐だったが、その実現や維持には多くの困難があった。実際には、全国で一律に土地を配分することは不可能で、兵役も一部の州の農民にのみ課せられていた②。こうした不均衡は人々のあいだに格差を生み出し、土地を捨てて逃亡するものも多かった。その一方で、貴族を中心とする高位の官僚は大土地所有を認められ、隷属的な農民に耕作させる**莊園**を経営して、その経済的な基盤とした。

こうしたなか、7世紀末に皇帝となった**則天武后(武則天)**③が科挙官僚を重用したことで、政治の担い手は貴族から科挙官僚へと移りはじめた。8世紀初めに体制の立て直しをはかった**玄宗**は、農民からの徴兵をやめ、傭兵を用いる**募兵制**を採用して、辺境においた**節度使**に軍団を指揮させた。しかし、強大な力をもつようになった節度使が**安史の乱**④と呼ばれる反乱をおこし、唐は危機におちいった。安史の乱はウイグルの援軍によってようやく鎮圧されたものの、これをきっかけに唐の国家や社会は性格をかえることになった。

各地の節度使は自立の傾向を強め⑤、吐蕃・南詔の侵攻もあって、中央政府の力のおよぶ範囲は縮小した。唐は財政再建のため、780年に**兩税法**を定め、**宰相の楊炎が実施した**。現住地で所有する資産の額に応じて夏・秋2回の課税をおこなうこととした。これは、麦作の普及や貧

東アジア諸国の都城 長安では、北側の中心に皇帝の宮城がおかれ、南にのびる中央の大通りを軸にしてつくられた柵目状の区画に、役所と人々の生活空間が整然と配置された。また、南の城外には、皇帝が天をまつる祭壇(天壇)がおかれた。

②隋や唐の初期には、おもに長安・洛陽の周辺で兵士を徴発し、都や辺境の守備にあてての制度があった。これを**府兵制**とも呼ぶ。

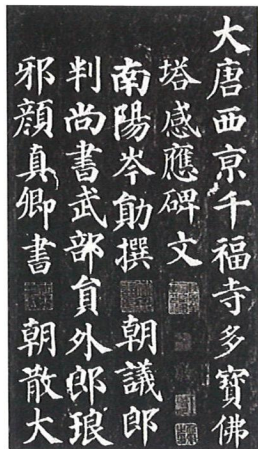
③高宗の皇后で、高宗死後に皇帝となり、国号を周(690～705)と改めた。

④中心人物であった**安祿山**(705～757)・**史思明**(?～761)の名からこのように呼ばれる。彼らはソグド人や突厥人の血をひいていた。

⑤安史の乱から五代十国の時期にかけて、節度使は内地にもおかれ、行政・財政の権力を握って軍閥化した。こうした節度使のことを**藩鎮**とも呼ぶ。



唐代の輕食 唐代には麦を粉にして食べる西方の習慣が中国に広まり、クッキーや餃子のような小麦粉を使った食品も現れた。華北では麦作が盛んになり、製粉施設も多くつくられた。



顔真卿の書 力強い書風で書道史に変革をおこした。

① 後梁・後唐・後晋・後漢・後周の5つ。

② 遊牧君主の称号で、4世紀頃鮮卑が用い、柔然・突厥・ウイグルに継承された。モンゴル帝国時代のカアンやカン(→p.144)もこれに由来する。なお、突厥はテュルク、すなわちトルコの漢字音写である。

③ 突厥は、馬との交換で中国から膨大な量の絹織物を得た。それは高価な奢侈品であり、可汗が家臣に与える重要な下賜品となったほか、ソグド商人を介して西方諸国に売り払うことにより、多くの利益を得ることができた。

④ 天神や精霊と交信するシャマン(呪術師)が予言や占い、病気の治癒などをおこなうところに特徴がある。

富の差の拡大といった社会の状況を反映したものであった。塩の専売も重要な財源となり、こうした新税制によって、唐はこののちも国力を保った。しかし、三省を中心とする体制の形骸化が進み、その支配は安定しなかった。9世紀後半に塩の密売人の黄巢がおこした反乱(黄巢の乱)が全国に広がるなか、節度使の朱全忠が大運河と黄河の接する汴州(開封)を拠点に力をのばし、10世紀初め、唐の帝位を奪って後梁を建てた。以後黄河中流域で交替した5つの王朝①と、そのほかの地域で興亡した10余りの国をあわせて、五代十国という。

則天武后の時代から五代十国にかけて貴族はしだいに衰え、かわって新興の地主層の力が強まった。これにともなう文化面でも変化が起こり、形式化した貴族趣味を離れた個性的な技法を追求する動きが現れた。呉道玄の山水画や顔真卿の書法などが、その例である。文学では白居易が平易な表現をめざし、さらに韓愈や柳宗元は、より自由な表現を可能にするものとして漢代以前の文体に注目し、古文の復興を主張した。

## 突厥とウイグル

中央ユーラシアの遊牧国家は、隋・唐とどのような関係を結んだのだろうか。

6世紀半ばにモンゴル高原の柔然を倒したトルコ系の突厥は、可汗の統率のもとで中央ユーラシアに領土を拡大した。西方ではササン朝と結んでエフタルを滅ぼしてソグディアナを支配下におき、東方では中国の北朝を威圧して絹馬貿易をおこない、莫大な利益を得た。彼ら固有の信仰は、天神(テングリ)信仰を中心とするシャマニズムであり、可汗の権威は天に由来するとみなされていた。

突厥は隋の時代に東西に分裂し、東突厥は内紛や自然災害で弱体化して唐に服属したが、7世紀末に独立を回復した。その後は唐への略奪遠征よりも絹馬貿易を重視するようになり、8世紀初めにはアラブ＝ムスリム軍の攻撃を受けたソグディアナの諸都市に軍事的な支援もおこなった。独立後の東突厥は、中央ユーラシアの遊牧民としてはじめて独自の突厥文字をもち、草原にはそれを刻んだ碑文(突厥碑文)が残されている。

8世紀半ばに突厥を倒した同じくトルコ系のウイグルは、遊牧諸部族の再編につとめた。ウイグルは、唐の安史の乱に際してその軍事力で鎮圧に貢献し、見返りに絹馬貿易などの利益を得た。唐との関係が深まる



と、ウイグルは草原に都城<sup>とじょう</sup>を造営して貿易・統治の拠点とし、都城の周辺では農耕も始まった。他方、ウイグルの支配層は、西方から伝わったマニ教を受容して国教とした。このように中央ユーラシアの遊牧国家では、社会・宗教面で大きな変化がおこりはじめていた。

840年、ウイグルは同じトルコ系の遊牧集団キルギスの攻撃で滅亡した。四散したウイグル人の一部は唐の領内に移住し、また、西の天山山脈<sup>てんざん</sup>方面に移住した一部はオアシス地域に定着して、都市民や農民となった<sup>⑥</sup>。彼らのあいだには、マニ教のほかに仏教やネストリウス派キリスト教も広まり、ウイグル語訳・ウイグル文字の仏教經典<sup>きようてん</sup>や壁画<sup>へき</sup>など多彩な文化遺産が残されている。

## ソグド人

Q> ソグド人は、中央ユーラシアや東アジアにおいてどのような役割を果たしたのだろうか。

突厥やウイグルのような遊牧国家の発展に大きな役割を果たしたのは、ソグド人であった。彼らはブハラやサマルカンドなどソグディアナのオアシス地域に住むイラン系の民族で、個別の都市国家を営んでいた。地の利を生かして早くから隊商交易に乗り出したソグド人は、遊牧国家の保護を得て中央ユーラシア一帯におよぶ通商ネットワークをつくりあげ、北朝から隋・唐の時代にかけて中国にも進出・居住した。

ソグド人は、遊牧国家に集積された絹織物をはじめとする奢侈品<sup>しゃしひん</sup>をビザンツ帝国などと交易したほか、外交官の役割も果たし、遊牧国家とは共生関係にあった。文化交流の面では、様々な宗教を突厥やウイグルに伝えたほか、ソグド文字はウイグル文字のもととなり、それはのちのモンゴル文字や満洲文字<sup>まんしゅう</sup>に受け継がれた。8世紀にソグディアナがアラブ＝ムスリム軍に征服されると、ソグド人の名前は歴史上から消えていくが、彼らの経済・文化的な機能はのちのムスリム商人が担うことになった。



寄進をおこなうウイグル仏教徒 トウルファンにあるベゼクリク千仏洞(仏教石窟)の壁画。右上のウイグル文字の説明から、描かれている人物の名前(歡喜)と身分(王女)がわかる。

⑤ウイグルの移住後、中央ユーラシアの草原地帯ではトルコ系遊牧集団の西方への移動が活発化し、やがてカラハン朝(→p.107)が成立することになった。



突厥とソグド人 西安で発掘された6世紀後半のソグド人の墓室には、白い帽子のソグド人が長髪<sup>せいはん</sup>の突厥人と天幕(ユルタ)のなかで語らう姿や、荷を積んだラクダの様子が描かれていた。被葬者は、その名前からソグディアナのブハラ出身と推定されている。